

# カポーティ小説の詩的特質 (3)

## 強意的直喩の考察

大 園 弘

### はじめに

カポーティ(Truman Capote 1924-84)の小説(散文)を詩的に響かせている要因は何か。また、その要因がどのような詩的效果をもたらしているのか。筆者は前々稿<sup>①</sup>において、カポーティの21短編小説と3中編小説を対象とし、数多くの事例の韻律による詩的效果を考察した。さらに、前稿<sup>②</sup>においては、比喩も散文を詩的にする要因であるとの仮説を基に、*Other Voices, Other Rooms* (1948以下、*Other Voices* と略す)を対象として、比喩標識“( - )like(接尾辞 / 接続詞 / 前置詞)を含む直喩表現のデータの整理と詩的效果の考察を試みた。

本稿では前稿に続き、*Other Voices* における直喩の詩的效果を考察する。ただし、本稿で取りあげる直喩は、比喩標識“( as )~ as ”により形成される「強意的直喩(Intensifying Simile)」に限定する。第Ⅰ節では、散文の詩的雰囲気生成に関わる強意的直喩の概念を定義する。第Ⅱ節では *Other Voices* に確認できる“( as )~ as ”を含む全51事例の分類を試みる。第Ⅲ節では、第Ⅱ節で分類した“( as )~ as ”を含む全51事例のうち、第Ⅰ節の強意的直喩の概念に基づいて、散文の詩的度に関わると思われる強意的直喩22事例のすべてにわたり、更なる細分化(7区分)を試みつつ、それらの趣向や詩的效果を考察する。強意的直喩もまたカポーティの小説(散文)を詩的に響かせる要因の一つであることを事例の分析と考察をもって明らかにすることが本稿の目的である。

## I 散文の詩的度に関わる強意的直喩の定義

“( as )~ as ”により形成される強意的直喩は、形のうえでは、同等比較と同じ構造である。そのため、( 1-a )のような英文は強意的直喩と同等比較の両方の解釈可能性を秘めている。

( 1-a ) A is as pretty as B.

「A はとても美しい( かわいい )」( 強意的直喩 )

「A は B と同じくらい美しい( かわいい )」( 同等比較 )

では、( 1-a )が強意的直喩であるか同等比較であるかは、どのように区別できるのであろうか。( 1-a )の A と B に仮につぎのような語句をあてはめると、その区別の一つの目安が得られる。

( 1-b ) Mary is as pretty as a picture.

「Mary はとても美しい( かわいい )」

( 1-c ) Mary is as pretty as her sister.

「Mary は彼女の姉( 妹 )と同じくらい美しい( かわいい )」

( 1-b )は、“ Mary is pretty. ”という命題と“ A picture is pretty. ”という二つの命題を前提としており、“ Mary ”と“ a picture ”が“ pretty ”という共通の特徴( 形容詞 )によって結びつけられている。( 1-c )も同様に、“ Mary is pretty. ”という命題と“ Her sister is pretty. ”という命題が前提とされており、両者( “ Mary ”と“ Her sister ”)が共通の特徴( 形容詞 )によって結びつけられている。このように( 1-b )と( 1-c )は構造上まったく等しい。

だが、( 1-b )の A ( = Mary )と B ( = a picture )の関係が、( 1-c )の A ( = Mary )と B ( = her sister )の関係とは異なっていることもまた明らかである。( 1-b )におけ

る A と B との関係が「異質性」もしくは「意外性」にあるのに対し、(1-c)における A と B との関係は「同質性」にある。

つまり、(1-b)の二つ目の“as(a picture)”が、直喩表現を形成する喩標識“like”同様、被喩辞と喩辞とを異質性・意外性によって結びつける役割を担っているのに対して、(1-c)の二つ目の“as(her sister)”は単に比較の対象を明示する役割を担っているに過ぎない。

このように、“(as)~as”によって形成されるフレーズが強意的直喩か、単なる比較に重点をおいた同等比較であるかを識別する際には、A と B との関係性が極めて有効な判別基準になるものと考えられる。本稿では以下の論考において、A と B の関係が「異質性(「意外性」)である場合が強意的直喩と、その関係が「同質性」である場合は単なる比較(同等比較)と見なしたい。

ところで、(1-b)において、喩辞“a picture”)と被喩辞“Mary”)とのあいだの関係性は、(1-c)の A (=Mary)と B (=her sister)の関係性に比較すると、明らかに異質かつ意外ではあるが、この異質性・意外性は、実際にはそれほど強くは感じられない。少なくとも、「絵のように美しい(かわいい)」という表現自体は、特段、「詩的である」と形容するほどの意外性や新鮮味を伴うものではない。

この意外性、新鮮味の欠如は、強意的直喩の多くが慣用句として、言わば「使い古されている」ためである。事実、(1-b)の“as pretty as a picture”は、“as busy as bees”や“as cool as a cucumber”などと同じく、発話者自身の独創性により案出されたフレーズではない。<sup>(3)</sup>

慣用句化されたこれらのフレーズも、考案された当初は新鮮味をもって人々の感性に強く訴えかけたことであろう。被喩辞と喩辞との意外な結びつきに加え、二つの“as”にはさまれた単語と喩辞とが頭韻を踏んでいるという音韻上の心地良さが、これらのフレーズを人々のあいだに広く、かつ、早く浸透させていったと推測できる。そして皮肉なことに、これらは人々のあいだで繰返し使われるうちに、やがて新鮮味を欠く陳腐な言い回しと化していったに違いな

い。

以上の考察から、個別の文学作品において強意的直喩が新鮮味を損なうことなく詩的雰囲気醸し出すためには、当然のことながら、それらのフレーズが作者の独創性によって案出されたもの、すなわち、読者にとって初めて出くわすものであることが条件となるであろう。そうした強意的直喩の使用頻度と趣向に応じて、イメージの喚起力は強まり、作品の詩的度も高まるものと思われる。本稿で考察の対象となるのは、このような強意的直喩表現である。

## II *Other Voices* における“(as)~as”の分類

前節の考察に基づけば、“(as)~as”を含むフレーズは、つぎのように3とおりの分類が可能となる。

1. 単なる比較
2. 慣用句化された強意的直喩
3. 詩的度に関わる強意的直喩

本節ではこれらの区分にしたがって、*Other Voices* のなかで用いられている“(as)~as”を含む全51フレーズの分類を行なう。この51事例には“as far as”、“as much as”、“as soon as”、“as ~ as possible”などの慣用句は含まれていない。なお、2.「慣用句化された強意的直喩」と3.「詩的度に関わる強意的直喩」の区別に際して使用した辞書類は、主として、*Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary*(1973)、*Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary Fifth Edition*(1980)、『研究社 - ロングマンイディオム英和辞典<普及版>』(2003)である。また、3.「詩的度に関わる強意的直喩」には、便宜上、拙訳を付している。

1. 「単なる比較」に分類可能なフレーズは、全51事例中、以下の17事例である。

- (1) “He’s [Jesus Fever is] past a hundred but *alive as you are*.”<sup>\*(4)</sup>
- (2) One walked with easy grace, but the other moved *as jerky and quick as a boy*, ...  
( p 31 . )
- (3) “*Nice as any white girl*, I’ll tell you,” said Amy. “Pretty as a picture.”( p .79 . )
- (4) “Out here a person *old as us* is a grown up person.”( p 92 . )
- (5) “I can’t see how Randolph keeps *clean as he does* ( p 93 . )
- (6) Joel slackened his gait, for the hermit moved *slow as a cripple*; ... ( p 97 . )
- (7) “you is *as ignorant as that Keg Brown*...”( p .116 . )
- (8) ... : he [Joel] wished he were *as brave as Idabel*; ... ( p .119 . )
- (9) And Randolph, cleaning his nails with a goosequill, was *as stylized in his attitude as she*: ... ( pp .120 121 . )
- (10) One time, and it was *hot as now*, I was passing on the road, ... ( p .131 . )
- (11) She [Dolores] was like a child there, and *sweet as an orange is sweet*, ... ( p .143 . )
- (12) ... : his [Pepe’s] face was alive, yet dreamlike, brutal, yet boyish, foreign but *familiar* (as *something from childhood is familiar*). ... ( p .146 . )
- (13) Joel felt stronger than she, and *sure of himself as he’d never been with that other Idabel, the tomboy* ( p .172 . )
- (14) ... : Listen, she [Miss Wisteria] whispered, I’m no fool, I know you’re alive: unless you give me the answer, I shan’t save you, I shan’t say a word: are the dead *as lonesome as the living* ( p 205 . )
- (15) “Randolph,” he [Joel] said, “were you ever *as young as me*?”( p 208 . )
- (16) “Don’t think you’re going to stop me because you’re not; you don’t own everything; it’s just *as much mine as it is yours* and more so if the truth were known, ...”  
( p 228 . )

(17) ...every flowering heart shrivels *dry and pitted as the herb from which it bloomed*, ... (p .196 .)

2 . 「慣用句化された強意的直喩」に分類可能なフレーズは、全51事例中、以下の12事例である。慣用句されたフレーズであるために、大半が会話文のなかで用いられている。

(18) “*Smart as a whip*.” (p 5 .)

(19) “I’ll getcha *sure as shooting*; ...” (p 20 .)

(20) “Mama’s *as honest as the day is long*, ...” (p 33 .)

(21) “Nice as any white girl, I’ll tell you,” said Amy. “*Pretty as a picture*.” (p .79 .)

(22) “... another maintained he’d seen the two of them, the gambler and the child, seen them *clear as day* shining below the surface, naked now, and their hair long, green, tangled as seaweed.” (pp 99 100 .)

(23) “Hmn, sounds *green as grass* to me.” (p .105 .)

(24) “Ha, won’t get far that way,” she [Idabel] hollered, and *agile as a monkey* shinnied up the trunk (p .108 .)

(25) “We get *drunk as a coot* on those,” she [Idabel] said, ... (p .125 .)

(26) “I knows it *good as anything*.” (p .158 .)

(27) “Eat, go on and eat, get *fat as a hog*,” she [Amy] said, ... (p .182 .)

(28) ... ; only two people with each other in witness, and it was as though a tide had receded leaving him [the black man] dry on a beach *white as bone*, and it was good at last to have come from so grey so cold a sea (p .188 .)

(29) ... ; still he [Joel] could hear the midget’s pennyflute voice purring *persistent as a mosquito*, above every fairground noise: ... (p .193 .)

3 . 「詩的度に関わる強意的直喩」に分類可能なフレーズは、全51事例中、以

下の22事例である。

(30) The windows of the house are cracked and shattered, *hollow as eyeless sockets*; ..( p .18 .)

その屋敷の窓はひび割れて粉々に砕け、目の玉のない眼窩のようにうつろである。

(31) *Relaxed as a rag doll*, Joel was stretched on a croquer-sack mattress, his legs dangling over the wagon's end( p 31 .)

ジョエルは布人形のようにリラックスして、黄麻布の袋の敷物の上にからだを伸ばし、両足を馬車の端から垂らしていた。

(32) The guide reins jangled, the hoofbeats of the mule made a sound *drowsy as a fly's buzz on a summer afternoon*( pp 38 39 .)

手綱はジャラジャラと鳴り、ラバの蹄は夏の午後のハエの羽音のように眠たげな音を立てた。

(33) The diamond glitter of the afternoon hurt his eyes, and he [Joel] was *as slippery with sweat as a greased wrestler*; ..( p 65 .)

ダイヤモンドのような午後の煌きが彼の目を痛めつけた。彼のからだは、油を塗りこんだレスラーのように汗でびしょ濡れだった。

(34) High in chinaberry towers the wind moved *swift as a river*, the frenzied leaves, caught in the current, frothed like surf on the sky's shore( p 69 .)

センダンの木の高い梢の辺りでは、風が川のように速く流れ、荒れ狂ったような木の葉は、その流れに巻き込まれ、空の浜辺に打ち寄せる波のように泡立った。

(35) ... , the cabin loomed *mysterious as a sunken galleon hulk*, ..( p .70 .)

小屋は沈没したガリオン船さながら、不気味に浮かびあがった。

(36) ... : though not fat, it [Randolph's face] was *round as a coin*, smooth and hairless; ..( p .78 .)

太っているというわけではなかったが、ランドルフの顔はコインのように丸く、滑らかで髭が生えていなかった。

(37) ... : she had the eyes of a fiend, the lady did, wild witch-eyes, *cold and green as the bottom of the North Pole sea*; ..( p .81 .)

その女の人は悪魔のような目をしていて、凶暴で魔女のような目だった。北極の海底のように冷たくて緑色の目をしていた。

(38) ... another maintained he'd seen the two of them, the gambler and the child, seen them clear as day shining below the surface, naked now, and their hair *long, green, tangled as seaweed* ( pp 99 100 .)

また別の者は、あのふたり、ギャンブラーと子どものふたりが水中で光っているのははっきりと見たと主張した。今では裸で、ふたりの髪は海藻のように長く緑色でもつれ合っていたというのだ。

(39) "Shoot, boy, one time I had me a rising on my butt *big as a baseball*, and didn't pay it any mind whatsoever."( p .104 .)

「こんなの、平気よ。一度なんか、お尻に野球のボールくらい大きな腫物ができたわ。それでも何ていうことはなかったわ。」

(40) "Mr Sansom," said Amy, her lips *tight as the rosebud she stitched*. "It is Mr Sansom."( p .121 .)



「サンソムさんよ。」エイミーは唇を縫いかけのバラの蕾のように堅く結んで言った。「サンソムさんですよ。」

(41) “Honey, a mighty peculiar thing happen to that old lady, happen just before she die: she grew a beard; it just commence pouring out her face, real sure enough hair; a yellor color, it was, and *strong as wire* ( p .124 .)

「坊や、あのお婆さんにはとても奇妙なことが起こったのよ。ちょうど亡くなる前にね。顎鬚が生えてきたの。顔からよきによき伸びはじめたの。本物の毛よ。黄色くって、針金のようにごわごわだったわ。」

(42) ...; his [Pepe’s] eyes, narrow and sly and black, glittered beneath brows *thick as mustaches*, ..( p .138 .)

細くてずるそうで黒い男の目が、口髭のように太い眉の下で煌いていた。

(43) Days, *fast fading as snowflakes*, flurry into autumn, fall all around like November leaves, ..( p .150 .)

日々は、雪片のように瞬く間に溶けて、慌ただしく秋に突入した。そして11月の落葉のように辺り一面に降り敷いた。

(44) Then, in a voice *as urgent as the bell*, he [Randolph] added: ..( p .154 .)

それから、鐘のように切迫した声で、彼は言い添えた。

(45) ... : flowers of cottonboll clouds within a sky *as scandalously blue as kitten-eyes* were offensive in their sweet disrespect: ..( p .163 .)

子猫の目のようにひどく青い空に綿の花のような雲も、その優しげな不敬さが腹立たしかった。

(46) For piled no more than a foot beyond was a cotton-mouth *thick as his [Joel's] leg*, long as a whip; ..( p .179 .)

というのも、僅か1フィート先に、彼の脚ほど太く、ムチのように長い毒蛇がとぐろを巻いていたのだ。

(47) For piled no more than a foot beyond was a cotton-mouth thick as his [Joel's] leg, *long as a whip*; ..( p .179 .)

というのも、僅か1フィート先に、彼の脚ほど太く、ムチのように長い毒蛇がとぐろを巻いていたのだ。

(48) ... : his [Joel's] head was *light as a balloon*, and as hollow-feeling; ice as eyes, thorns as teeth, flannel as tongue; ..( p .198 .)

・・・彼の頭は風船のように、そして、うつろなほど軽かった。氷の目、トゲの歯、フランネルの舌。

(49) ... : his [Joel's] head was light as a balloon, and *as hollow-feeling*; ice as eyes, thorns as teeth, flannel as tongue; ..( p .198 .)

・・・彼の頭は風船のように、そして、うつろなほど軽かった。氷の目、トゲの歯、フランネルの舌。

(50) Go on, he [the man] told her [Zoo], tapping his cigar so the ash was flung in her face, go on gal, get down in the ditch; never mind why, says the man, and shoved her so she rolled over the embankment, landing on her back *helpless as a junebug* ( p 215 .)

さあ、行くんだ、男は彼女に命令し、葉巻の灰を彼女の顔に落とした。さあ、行け。溝に入れ。つべこべ言うな。男はそう言って彼女を突き飛ばすと、彼女は土手を転がり、コガネムシのように為すすべもなく天を仰いだ。

(51) “If I [Randolph] were *as wise as the mole*, if I were free and equal, then what an admirable whorehouse I should be the Madame of; ...”( pp 218 219 .)

「もし私がモグラのように賢ければ、そして自由で同等であれば、素晴らしい売春宿の女将になれるのに。」

### 第Ⅲ節 強意的直喩の分類と詩的效果の考察

前節で確認したとおり、*Other Voices* において「詩的度に関わる強意的直喩」に分類可能な比喩表現は22事例である。これらの事例は、作者が独自に考案したものであるために、いずれも新鮮味や意外性をもって読者に受け入れられるものばかりである。本節では、これら22事例を更に細分化し、その趣向や詩的效果を考察する。

#### Ⅲ 1 擬人法に分類可能な事例 (30)

(30) The windows of the house are cracked and shattered, *hollow as eyeless sockets*; ..(p .18 .)

その屋敷の窓はひび割れて粉々に砕け、目の玉のない眼窩のようにうつろである。

「擬人法 ( Personification )とは「人間でないものを人間になぞらえて表現する修辞法」<sup>(5)</sup>である。本事例では、屋敷“ the house ”が人間の顔に、そして屋敷の窓が人間の目になぞらえられているので、擬人法であると見なすことができる。さらに、ひび割れて粉々に砕けたこの屋敷の窓が、「目の玉のない眼窩」に喩えられることによって、この屋敷に髑髏のイメージが付与され、この屋敷のがらんとしたうつろさが不気味さを伴いつつ強調されている。事実、そこは、「かつて3人の美人姉妹が極悪非道な北部人の無法者に強姦され殺害されたと

いういわくつきの (p.17.) 建物であった。

このように、本事例では擬人法と“(as)~as”の強意的直喩によって、この屋敷の不気味さを伴ううつろさのイメージが詩的に、かつ、効果的に喚起されているのである。なお、この「不気味さを伴う、うつろさのイメージ」は *Other Voices, Other Rooms* (『遠い声・遠い部屋』) という題名にも反映されており、作品全体を貫く基調となっていることも付言しておきたい。

主人公である13歳の少年ジョエルは、母の死後、かつて、もの心つく前に別れた父と同居するために父の住む屋敷へ向かう旅に出る。彼は、途中、経由地のヌーン・シティ(Noon City)で一晩眠れぬ夜を過ごす。事例(30)は、ヌーン・シティの寂れた通りの様子を描いた場面からの抜粋である。ところで、ジョエルの目的地は父の住むスカリーズ・ランディング(Skully's Landing)であった。「髑髏の屋敷」と訳出可能なこの建物は、名称からして不気味さを漂わせているが、到着後、何日も父と会わせてもらえないジョエルに文字どおり不気味でうつろな空間と感じられていく。

「庭の上に聳えたつ屋敷の壁は、巨大な黄色の崖のようであり、アメリカ鶯が庭を見おろす8つの窓を緑色に縁どっていた。」(p.64.)

「ジョエルは立ち上がると、この屋敷の黄色い壁を見あげて、最上階の窓のどれが自分の部屋の窓で、どれが父親の部屋の窓で、どれがランドルフの部屋の窓なのか思いめぐらしてみた。まさにその時である。ジョエルは奇妙な女の姿を見た。女は左隅の窓のカーテンを手繰り寄せ、まるで挨拶でもするかのように、あるいは、賛意を表しでもするかのように、ジョエルに向かって微笑み、頷いてみせた。だが、ジョエルには見覚えのない女だった。そのおぼろげな顔といい、潤んだマシュマロのような目鼻立ちといい、小部屋の波打った鏡に映った自分自身の蒸気のような鏡像をジョエルに思い起こさせた。」(p.67.)<sup>(6)</sup>

もう1例である。物語の終盤で、ジョエルとランドルフが隠遁者のリトル・サンシャイン(Little Sunshine)が住むクラウド・ホテル(Cloud Hotel)を訪ねる場面がある。森を抜け、やがて「ホテルはふたりの前に、骨を積み上げた小山のような姿を見せた。」(p.221.)かつてはスカリーズ家の親戚筋が経営し、今では廃墟と化したこのホテルもまた、不気味でうつろな空間である。リトル・サンシャインは物語の中盤でジョエルにこのホテルの歴史を語り、こう結んでいる。

「…芝生も、道路も、小路も、すべて荒れ放題になった。広いベランダは陥落し、どの煙突も、沼地に深く沈みこんだ。嵐で根こぎにされた木々は、ポーチへと倒れかかった。水ヘビが舞踏室の朽ちかけたピアノの弦の上を這いまわり、夜毎の曲を奏でた。恐ろしい、奇妙な眺めのホテルだった。」(p.100.)

このように、事例(30)は単にその場面のための詩的効果にとどまらず、作品全体に流れる雰囲気をも表現し得ているという意味において、極めて重要な一文でもある。

### Ⅲ 2 押韻効果が認められる事例 (31)・(33)・(39)・(43)

“(as)~as”による強意的直喩のうち、“as busy as bees”や“as cool as a cucumber”などのように、慣用句化されたフレーズに頭韻(Alliteration)を踏んだものが多いことは周知の事実である。二つの“as”に挟まれた形容詞や副詞の頭文字と喩辞の頭文字とが音の上で一致する現象であるが、「リズムの助けをかりて<強意>の効果をいっそう高めようとした<sup>7)</sup>」だけではなく、人々の記憶にとどまりやすいという効果もあるであろう。リズムカルかつ記憶にとどまりやすいという性質のために、慣用句化が促進されるという、新鮮味の点では、言わば「短命の」フレーズである。Other Voices には、同様の押韻効果が認められ

る事例が (31)・(39)の 2 事例、類似もしくは変則形が (33)・(43)の 2 事例みられる。

(31) *Relaxed as a rag doll*, Joel was stretched on a croquer-sack mattress, his legs dangling over the wagon's end( p 31 .)

ジョエルは布人形のようにリラックスして、黄麻布の袋の敷物の上からだを伸ばし、両足を馬車の端から垂らしていた。

本事例は、ジョエルがヌーン・シティのつぎの経由地であるパラダイス・チャペル(Paradise Chapel)から、迎いの馬車の荷台にからだを横たえてスカリーズ・ランディングに向かう場面からの引用である。前日、ヌーン・シティで眠れぬ夜を過ごし、くたくたに疲れ果てていたジョエルにとって、迎いの馬車は何よりもの救いであったに違いない。“r”の頭韻が認められるこのフレーズは、そうしたジョエルの心身の様子を巧みに表現しており、“rag doll”はまさにぴったりの喩辞である。

(39) “Shoot, boy, one time I had me a rising on my butt *big as a baseball*, and didn't pay it any mind whatsoever.”( p .104 .)

「こんなの、平気よ。一度なんか、お尻に野球のボールくらい大きな腫物ができたわ。それでも何ていうことはなかったわ。」

本事例は、お転婆娘アイダベル(Idabel)の台詞である。お尻にできた腫物を“as *big as baseball*”と“b”の頭韻を工夫し、野球のボールのサイズに喩えたユーモラスな誇張表現である。

(33) The diamond glitter of the afternoon hurt his [Joel's] eyes, and he was *as slippery with sweat as a greased wrestler*; ..( p 65 .)

ダイヤモンドのような午後の煌きが彼の目を痛めつけた。彼のからだは、油を

塗りこんだレスラーのように汗でびしょ濡れだった。

(43) Days, *fast fading as snowflakes*, flurry into autumn, fall all around like November leaves, ... (p.150.)

日々は、雪片のように瞬く間に溶けて、慌ただしく秋に突入した。そして11月の落葉のように辺り一面に降り敷いた。

事例(33)と(43)は“(as)~as”の強意的直喩における伝統的な押韻形式とは異なる。だが、押韻の点でいずれも興味深い事例である。

事例(33)は、“s”音の頭韻(“as slippery with sweat as...”)であるが、ジョエルの中から汗で濡れているのは、先行する節の主部(“The diamond glitter of the afternoon”)から明らかである。したがって、“with sweat”という副詞句はなくても文意に支障を来すことはない。すなわち、“with sweat”は冗語である。だが、重要なのは、敢えて“with sweat”を添えた点である。冗語法(Pleonasm)は「強調など、修辭的効果を上げるために、必ずしも必要ではない語を加える表現法」<sup>(8)</sup>と説明される。本事例では“with sweat”を添えることで文にバランスとリズムを付与し、押韻効果をねらったものと推測できる。

事例(43)は、*Other Voices* のなかでも屈指の味わい深い直喩表現である。一日一日がとても速く過ぎ去っていくという印象や実感は誰もが体験する日常的な体験であるが、そうした印象や実感を独創性豊かに表現しているところに、この事例の味わい深さ(詩的趣向)がある。作者の独創性は、まず、この英文に“f”音の頭韻と“l”音の子音韻を織り交ぜることで、流れるような心地良いリズムを創出している点にある。<sup>(9)</sup> 強意的直喩のフレーズ(“*fast fading as snowflakes*”)もその一部である。

Days, *f*ast *f*ading as snowflakes, *f*lurry into autumn, *f*all all around like November leaves, ... (“f”音の頭韻)

Days, fast fading as snowflakes, flurry into autumn, fall all around like November leaves, ... (“1”音の子音韻)

作者の独創性の第2点目は、強意的直喩によって、瞬く間に溶けて消え去る雪片を喩えとすることで、日々が過ぎ去っていく速さの感覚を強調するにとどまらず、雪片を喩辞に用いることによって、同時に儂さや空しさなどのイメージを表現し得ていることである。事実、この英文は、自分を置き去りにして姿を消した過去の友との思い出を切なく振り返っているランドルフの台詞であるが、この儂さや空しさなどのトーンは、文中の二つ目の直喩“like November leaves”を含む「11月の落葉のように辺り一面に降り敷いた」という叙述にも、見事に引き継がれている。

### Ⅲ 3 「直喩の連鎖」の事例 (34)・(35)

(34) High in chinaberry towers the wind moved *swift as a river*, the frenzied leaves, caught in the current, frothed like surf on the sky's shore ( p. 69 .)

センダンの木の高い梢の辺りでは、風が川のように速く流れ、荒れ狂ったような木の葉は、その流れに巻き込まれ、空の浜辺に打ち寄せる波のように泡立った。

(35) ..., the cabin loomed *mysterious as a sunken galleon hulk*, ... ( p. 70 .)

小屋は沈没したガリオン船さながら、不気味に浮かびあがった。

上掲の2事例は、以下の一節のからの抜粋であり、強意的直喩以外にも、隠喩(“*frenzied leaves*”)、比喩指標“like”によって導かれる二つの直喩表現(“*like surf on the sky's shore*”と“*like sea-floor plants*”)、比喩指標“as though”によって導かれる直喩表現(“*as though it were submerged in dark deep water*”)を含む興



味深い一節として前稿でも取りあげた。

High in chinaberry towers the wind moved *swift as a river*, the *frenzied leaves*, caught in its current, frothed *like surf on the sky's shore*. And slowly the land came to seem *as though it were submerged in dark deep water*. The fern undulated *like sea-floor plants*, the cabin loomed *mysterious as a sunken galleon hulk*, and Zoo, with her fluid, insinuating grace, could only be, Joel thought, the mermaid bride of an old drowned pirate( pp 69 70 .)

「ゼンダンの木の高い梢の辺りでは、風が川のように速く流れ、荒れ狂ったような木の葉は、その流れに巻き込まれ、空の浜辺に打ち寄せる波のように泡立った。また、陸地が暗く深い海底にゆっくりと沈んでいくかのように思われた。シダは海藻のようにうねり、小屋は沈没したガリオン船のように不気味にぼんやりと現われた。そして、ジョエルには、流れるような、意味ありげな気品を帯びたズーが、その昔、溺死した海賊の人魚の花嫁にしか思えなかった。」

この一節はジョエルがズーとその祖父ジーザス・フィーバーの屋外での祈禱の儀式に立ち会う場面からの抜粋である。祈禱の最中、夏の嵐を思わせる暗雲を伴う疾風が吹きはじめ、ゼンダンの木の梢を激しく揺さぶる。もちろん、ジョエルは地上から頭上のざわめく枝葉を見上げているのであるが、梢を揺らす疾風が「川」になぞらえられたことに端を発し、続々とイメージの拡張が促されていく。「風にざわめく梢の葉」は、見上げるジョエルの目に「空の河岸に打ち寄せる波」の泡立ちに感じられる。この錯覚は、同時に、ジョエルが立っている地面(陸地)が「まるで暗く深い海底に沈んでいくかのような」新たな錯覚を誘発し、地面から生え出る<シダ=海藻>、<小屋=沈没したガリオン船>、<ズー=溺死した海賊の人魚の花嫁>という一連のイメージを引き起こす。

このように、「連鎖反応的に直喩が直喩を呼び出す」<sup>80</sup>展開を「直喩の連鎖」

と言うが、事例 (34)は直喩の連鎖を引き起こすきっかけとしての直喩であり、事例 (35)は連鎖の展開の中で、言わば必然的に生成された直喩なのであって、両者は、単に「強意」のみを伝える以上の役割を担っている。

#### Ⅲ 4 動物を喩辞とした事例 (32)・(45)・(50)・(51)

人間の生活は、動植物と密接な関係を保ちつつ維持されている。言語活動も然りである。私たちは動植物の特徴や、私たちが個々の動植物に対して抱くイメージを言語に反映させることによって、他の手段では表現することの困難な機微やニュアンスを他者と共有しあっている。そう考えると、直喩や隠喩などのレトリックに動植物が援用されるのは、極めて自然な成りゆきである。以下の4事例には、ハエ、子猫、コガネムシ、モグラが用いられており、ハエについてはその羽音が、子猫についてはその目が喩辞とされている。順にみていこう。

(32) The guide reins jangled, the hoofbeats of the mule made a sound *drowsy as a fly's buzz on a summer afternoon* ( pp 38 39 .)

手綱はジャラジャラと鳴り、ラバの蹄は夏の午後のハエの羽音のように眠たげな音を立てた。

本事例は、スカリーズ・ランディングに向かう馬車の荷台で眠りに落ちかけるジョエルの様子を描いた場面からの抜粋である。手綱のジャラジャラと鳴る音に、ゆっくりと歩を進めるラバの規則的で単調な蹄の音が重なりあい、(そして、おそらくは馬車の心地良い揺れも手伝って)前夜、ヌーン・シティで眠れぬ夜を過ごしたジョエルは、激しい睡魔に襲われる。ところで、ラバの規則的で単調な蹄の音が眠気を誘うのは理解可能だとしても、「夏の午後のハエの羽音」も同様かと問われれば、筆者は迷わざるをえない。「ハエの羽音」は、蚊

の羽音のごとく、むしろ、眠りを妨げる雑音のイメージに近いからである。

だが、被喩辞「ラバの蹄の音」と喩辞「ハエの羽音」との、この一見して意外とも思える関係が、「単調さ」という共通項で結びつくことに気づけば、この強意的直喩が作者のオリジナルにして自然なフレーズであることがわかる。また、喩辞「ハエの羽音」が「夏の午後の」という修飾語句(形容詞句)を伴っている点にも注目すべきであろう。ハエは夏を活動期とするが、「夏の午後」の典型的なイメージは「けだるさ」である。「ハエの羽音の単調さ」に「夏の午後のけだるさ」が加わることで、「眠たげな(“drowsy”)という形容詞の意味がより鮮明に浮かびあがってくる。

(45) ... : flowers of cottonboll clouds within a sky *as scandalously blue as kitten-eyes* were offensive in their sweet disrespect: ..(p .163 .)

子猫の目のようにひどく青い空に綿の花のような雲も、その優しげな不敬さが腹立たしかった。

本事例の被喩辞は「空」である。その空の青さを強調する喩辞は、さまざま存在するであろう。そのなかで作者が選択したのは「子猫の目」である。生後間もない子猫の目の色が、俗に“kitten blue”と呼ばれるように、子猫の目と青(色)との結びつきに作者の独創性は認められないが、空の青さを強調するための喩辞として子猫の目の青さを選択した点は、もちろん作者の感性の反映である。なお、副詞“scandalously”にも注目しておきたい。空の青さは、比喩標識“(as)~as”によって強調されているわけなので、“scandalously”(「ひどく(青い)」は冗語とも思える。だが、そうではない。本事例はジーザス・フィーバーの亡骸を埋葬する場面からの抜粋なのだが、その日は青い空に白い雲が浮かぶ、埋葬の日の設定としては似つかわしくない日和である。「青空に浮かぶ綿の花のような雲」は、普段であれば、人の目に穏やかにも麗らかに映じるのであろうが、その日が埋葬の日であったために、それは「不敬(“disrespect”)

にも「腹立たしく (“offensive”) も感じられたわけであり、このようなイメージの連鎖のなかで、空の青も「ひどく / 中傷的であるほどの」青と表現されたと解釈できる。作者は子猫の青い目に、何かしら、そうしたイメージを感じとっていたものと推測できる。

(50) Go on, he [the man] told her [Zoo], tapping his cigar so the ash was flung in her face, go on gal, get down in the ditch; never mind why, says the man, and shoved her so she rolled over the embankment, landing on her back *helpless as a junebug* (p 215 .)  
 さあ、行くんだ、男は彼女に命令し、葉巻の灰を彼女の顔に落とした。さあ、行け。溝に入れ。つべこべ言うな。男はそう言って彼女を突き飛ばすと、彼女は土手を転がり、コガネムシのように為すすべもなく天を仰いだ。

つぎに事例 (50) である。ズーは祖父ジーザス・フィーバーの死後、予てからの憧れの地、ワシントン D.C. へと徒歩で旅立つ。彼女は途中で白人の男たちに強姦され、あえなくスカリーズ・ランディングへ引き返してくる。本事例は、ジョエルがズーの話をもとにして、事の顛末を直接話法ふうにつづっている叙述からの抜粋である。O. Henry (1862-1910) に『The Man Higher Up』(1908) という短編小説があるが、そのなかにも“Why, Alfred E. Ricks, as we left him, was *as helpless as a turtle on its back*.” (「何と、アルフレッド・E・リックスは、私たちが彼と別れたとき、ひっくり返ったカメのようにどうしようもない様子だった」下線筆者)<sup>3)</sup> という似かよった一文がある。カメであれコガネムシであれ、私たちはごくまれに、こうした生き物がひっくり返ってもがいている場面に出くわし、僅かの滑稽味と少なからぬ憐れみを感じ、本来の姿勢に戻してあげたい衝動にかられることがある。男たちの暴力に為すすべもなく身をまかさざるをえなかったズーの苦境は醜悪と痛恨の極みであり、内容面では詩的もしくは美的イメージと対極にあるが、自身の力では如何ともしがたい状況におかれた彼女の憐れな状況を、「コガネムシのように為すすべもなく」と描写したこの強意

的直喩は作者のオリジナルにして万人に受容可能なフレーズである。

(51) “If I [Randolph] were *as wise as the mole*, if I were free and equal, then what an admirable whorehouse I should be the Madame of; ...”(pp 218 219 .)

「もし私がモグラのように賢ければ、そして自由で同等であれば、素晴らしい売春宿の女将になれるのに。」

最後に事例(51)である。モグラが“(as)blind as a mole”という慣用句で用いられることはよく知られている。「よく見え[読め]ない,よく見分けがつかない」<sup>12)</sup>の意味である。本事例では、モグラがこの慣用句の意味とはほぼ正反対の意味で捉えられており、その点がこの事例の意外性であり、新鮮味でもある。視覚が退化し、地中のトンネルで暮らすモグラの特性は、慣用句に反映されているように、とかく、そのマイナス面に目が向けられがちである。ところが本事例はそうではない。下掲の引用文は、事例(51)の直前の、ランドルフの発言であるが、そこにも言明されているように、視力を失ったハンディキャップをもつともせず生き抜くモグラの知恵・賢さに注目している点に本事例の意外性と新鮮味が認められる。

“... : sightless, he [a mole] goes his separate way, knowing truth and freedom are attitudes of the spirit.”(p 218 .)

「目が見えなくても、モグラは、真実と自由は心構えの問題だとわきまえて、独自の道を進む。」

### Ⅲ 5 誇張法に分類可能な事例 (37)・(39)・(46)・(47)

「誇張法(Hyperbole)とは「事象から受けた印象の強さを伝えようとする」<sup>13)</sup>レトリックである。それは、表現形式上、「直喩にかぎらず、隠喩、換喩、提

喩、といったさまざまな比喩形式をよそおっている場合がある<sup>14)</sup>ので、“(as) ~ as”という比喩標識の強意的直喩のなかにも誇張法に該当する事例が含まれている。強調を目的とした強意的直喩があるものごとの特徴 形容詞・副詞)を強めることをねらいとするのに対して、誇張法に該当する強意的直喩のねらいは、あるものごとから観察者が受けた印象の強さを伝えることによって、極度の緊張感やユーモアを派生させることにあると考えられる。*Other Voices* において誇張法に該当するのが以下の4事例である。

(37) ... : she had the eyes of a fiend, the lady did, wild witch-eyes, *cold and green as the bottom of the North Pole sea*; ... (p 81 .)

その女の人は悪魔のような目をしていて、凶暴で魔女のような目だった。北極の海底のように冷たくて緑色の目をしていた。

まず、事例(37)である。<sup>15)</sup>ジョエルはランディングに到着後、何日も父に会わせてもらえない。ある日、彼は外から屋敷を眺め、「最上階に並んだ窓のうち、どれが自分の部屋の窓で、どれが父ので、どれがランドルフのだろうかと思ひめぐらした。すると、そのとき、彼は奇妙な女の姿を目撃した。(p 67 .)その女の正体は、女装をしたランドルフなのであるが、ジョエルは、この屋敷には自分には明かされていない女が住んでいるものと信じて疑わない。本事例は、ジョエルが後日ランドルフとエイミーに、その女の特徴を伝えている場面からの引用であるが、ジョエルはふたりから疑われていると感じとり、「呆れるほど入念に説明を練りあげた。(p 81 .)つまり、ジョエルはふたりに自分の話を信じてもらいたいあまり、その女の見た目を、聞き手にもそれと見透かされてしまうほど、誇張気味に粉飾してしまったわけである。むろん、ジョエルであれ、聞き手のふたりであれ、北極の海底に潜ったこともなければ、北極の海底の緑色を見たことはないはずである。本事例が誇張表現である所以はここにある。

(39) “Shoot, boy, one time I had me a rising on my butt *big as a baseball*, and didn’t pay it any mind whatsoever.”( p .104 .)

「こんなの、平気よ。一度なんか、お尻に野球のボールくらい大きな腫物ができたわ。それでも何ていうことはなかったわ。」

つぎに事例(39)である。本事例は、12歳の少女アイダベルが13歳の少年ジョエルに向けて発した言葉である。年齢のうえでは、二人ともまだ「子ども」である。誇張表現を用いる傾向の強い特定の年齢層があるかどうかは筆者には不明だが、「子ども」の言語活動には自ずと誇張表現が多く用いられるのではないかと推測できる。年齢が低ければ低いだけ、初めて体験する物事の割合が多い反面、彼らは「通常の言語表現では手にあまる異常な、異様な、ただならぬことが目の前で起こっている」ときに、その驚きを表現する「手持ちの札」の持ち合わせがないからである。<sup>66</sup>そこで、子どもたちは既知の語彙を探りながら、その驚きに最寄りの表現を創作する。その表現に実相との誤差や誇張が生じるのは、むしろ、当然のことである。

本事例 「野球のボールくらい大きな腫物」 は明らかに誇張ではあるが、内容はともかくも、12歳のお転婆娘の作 その実は作者の創作 としては秀逸であろう。誇張法に言及したある評論のなかで、「度を越した大きさや小ささは、私たちの感性に訴えない」ゆえに、「大きさにも小ささにも、限度がある<sup>67</sup>」との指摘がなされているが、お尻の腫物のサイズは、ボールに喩えるとすれば、“golf ball”では単なる比較に近いであろうし、“basketball”や“volleyball”では「度を越した大きさ」となろう。喩辞としては“baseball”あたりが妥当なところである。また、本事例は、Ⅲ 2でも触れたとおり、子音“b”の押韻も観察できる。

“... I had me a rising on my butt big as a baseball, ...”

(46) For piled no more than a foot beyond was a cotton-mouth *thick as his [Joel's] leg,*  
long as a whip; ..( p .179 .)

というのも、僅か1フィート先に、彼の脚ほど太く、ムチのように長い毒蛇が  
とぐろを巻いていたのだ。

(47) For piled no more than a foot beyond was a cotton-mouth thick as his [Joel's] leg,  
*long as a whip;* ..( p .179 .)

というのも、僅か1フィート先に、彼の脚ほど太く、ムチのように長い毒蛇が  
とぐろを巻いていたのだ。

事例 (46)・(47) は同一のセンテンスに含まれる強意的直喩による誇張表現である。ジョエルとアイダベルは、リトル・サンシャインの住むクラウド・ホテルに向かう(10章)。途中、川に架けられた板を渡っていると、目の前に毒蛇がとぐろを巻いているのに気づいて、ジョエルはハッと息のみ、凍りついてしまう。本事例はその場面からの抜粋である。いずれの事例ともに「毒蛇 (“cotton-mouth ”)を被喩辞としている。

さて、ジョエルのように、突如、毒蛇に遭遇したと想像してみよう。その毒蛇は、おそらく、実際のサイズよりも大きく見えるに違いない。咄嗟の出来事に、見慣れたものを見るときに平常心を失い、恐怖感や薄気味悪さに支配された、言わば「感覚的な目」で毒蛇を見てしまうからである。「こども」であれば、尚更であろう。「こども」は「物の大きさを測るのに、自分の身体を基準にしている<sup>(8)</sup>」と考えられるので、同じ毒蛇でも「こども」の目には、「おとな」の目に映じるより以上に大きく見えると想像できる。読者には誇張気味に感じられる「脚ほどの太さ」の毒蛇は、少年ジョエルの「感覚的な目」には、まさしく自身の脚ほどの太さに映ったのであろう。

毒蛇の長さ(事例(47))のほうはどうであろうか。蛇はとぐろを巻いていたわけだから、視覚的にその長さを「とても長い」と実感したわけではない。おそ



らくは、「脚の太さ」のイメージがベースとなって「とても長いにちがいない」というイメージを直観的に、もしくは感覚的に作り上げたのであろう。だが、ここではむしろ喩辞が「ムチ」である点に注目したい。

ムチは用途によって長さがさまざまである。本事例では長いムチが、しかもとても長いムチが想定されているのであるが、ムチが喩辞であることで、読者は長さだけではなく、蛇とムチの形状の類似をも想起することができる。まさにイメージの連鎖である。ムチを地面の上で渦巻き状にすれば、とぐろを巻いた蛇に似ていなくもないであろうし、ムチの柄を地面に近づけて左右に振ると、地を這う蛇そっくりに見えるであろう。また、ムチが一瞬のうちに対象を打つさまは、蛇が瞬時に獲物に襲いかかるイメージと重なりあう。

筆者は、事例(47)が事例(46)と同一のセンテンスに含まれ、かつ、被喩辞(毒蛇)も同じであることから、事例(46)と同じく誇張表現と見なした。だが、以上の考察のとおり、本事例は誇張表現という枠を越えて、イメージの広がりをもつ巧みな強意的直喩となっている。

### Ⅲ 6 人間のからだの一部を被喩辞とする事例 (36)・(38)・(40)・(41)・(42)・(48)・(49)

下掲の7事例は、すべて人間のからだの一部を被喩辞とする。しかも、そのすべてが、偶然にも頭部に集中している。記載順に、「顔」(事例(36))・「髪」(事例(38))・「唇」(事例(40))・「顎鬚」(事例(41))・「眉」(事例(42))・「頭」(事例(48)・(49))である。順にみていこう。

(36) ... : though not fat, it [Randolph's face] was *round as a coin*, smooth and hairless; ... (p.78.)

太っているというわけではなかったが、ランドルフの顔はコインのように丸く、滑らかで髭が生えていなかった。

本事例は、ランドルフの顔がまん丸であるさまを、コインを喩辞として表現した強意的直喩である。本事例の特徴は、コインを喩辞とすることで、ランドルフの顔のかたち(円形)のみならず、摩耗したコインの表面の感触を読者にイメージさせることによって、ランドルフの顔の滑らかで髭の生えていないさま(“smooth and hairless”)を伝え得ている点にある。ランドルフの顔のこうした特徴は、作品のなかで繰返し言及される。「彼の顔は丸い熟した桃のようだった(His face was like a round ripe peach. )(p. 81. )」「髭の生えていない顔(his hairless face )(p. 84. )」「ランドルフの顔の円形の構成(the circular composition of Randolph’s face )(p. 141. )」「桃色の、髭の生えていない肌(the pink hairless skin )(p. 154. )」「丸くて滑らかな顔(his round smooth face )(p. 167. )」「丸い桃色の顔(round pink head )(p. 209. )」などである。

以上の描写から抽出可能なランドルフの顔の特徴は、丸く、滑らかで、髭が生えておらず、桃色であるということである。これらの特徴は読者に赤ん坊を想起させるのであるが、事実、作者は物語の終盤で以下のような記述を行っており、まるで赤ん坊のようなランドルフの無力さを伝えている。事例(36)は読者にこのようなランドルフ像を抱かせる役割の一端を担う重要なフレーズとなっている。

And Joel realized then the truth; he saw how helpless Randolph was: more paralyzed than Mr Sansom, more childlike than Miss Wisteria, what else could he do, once outside and alone, but describe a circle, the zero of his nothingness( p. 227. )

「そしてジョエルはそのとき真実を悟った。彼はランドルフが如何に無力であるかがわかった。ミスター・サンソムより麻痺し、ミス・ウィステリアよりもこどもっぽい。ひとたび、外の世界で一人になると、円を、無のゼロを描くより他にどうしようもないのだ。」

Twice he [Randolph] he fell down, and sat there on the ground, solemn and baby-eyed, until Joel helped him up( p 228 .)

[ ランドルフは二度倒れ、真面目な顔つきで、赤ん坊のような目をし、地面に座りこんでいた。]

(38) ... another maintained he'd seen the two of them, the gambler and the child, seen them clear as day shining below the surface, naked now, and their hair *long, green, tangled as seaweed* ( pp 99 100 .)

また別の者は、あのふたり、ギャンブラーと子どものふたりが水中で光っているのははっきりと見たと主張した。今では裸で、ふたりの髪は海藻のように長く緑色でもつれ合っていたというのだ。

つぎに、「髪」を被喩辞とする事例 (38)である。かつて栄華を誇ったクラウド・ホテルが廃墟と化したのは、1893年に起こった2件の悲劇が原因だった。13歳の少年が100フィートの木の上からクラウド湖(Cloud Lake)に飛びこんで事故死した。次いで、ひとりのギャンブラーが湖で溺死した。以後、ふたりの亡霊が湖に出没するようになり、たちまち、ホテルから客足が遠のいていった。クラウド湖は、やがて「溺れ池 (“Drownin Pond” )と呼ばれるようになった。本事例は、亡霊の目撃証言の一部である。

ところで、私たちは水中の物体が、光の屈折率の影響で、実際の大きさや位置や深さとは異なって見えるということ、体験上、知っている。水中は、極端に言えば、異界であり、私たちの創造力をさまざまにかきたてる空間である。作者はこの物語のなかで、水中という空間のそうしたイメージの喚起力を、たとえばつぎのように、巧く活用している。

Also, this is lonesome country; and here in the swamplike hollows where tiger lilies

bloom the size of a man's head, there are luminous green logs that shine under dark marsh water like drowned corpses; ..( p 3 .)

「また、ここはもの寂しい土地でもある。沼地のくぼみには、人の頭の大きさのオニユリが咲き、黒い沼底には緑色の丸太が溺死体のようにぼーっと光って見える・・・。」

この事例では被喩辞の「緑の丸太」が「溺死体」という喩辞に修飾されることによって、この沼地の不気味さが表現されている。

では、事例 (38)はどうかであろうか。水中(クラウド湖/溺れ池)にたゆたう長くて緑色の藻が、亡霊たちのもつれ合う髪に見えることはあるであろう。沼底の緑色の丸太が、溺死体に見えるように、である。その場合、「長くて緑色の藻」が被喩辞であり、「亡霊たちのもつれ合う髪」が喩辞となる。ところが、事例 (38)では、被喩辞と喩辞との関係が逆転している。それは、本事例中の目撃者が、水中のふたりの姿を亡霊に間違いないと確信していることを物語っているが、被喩辞と喩辞との関係の相違はともかくも、作者が水中という空間のイメージの喚起力を巧みに活用している点に、本事例の詩的效果が認められるであろう。なお、引用文中の“clear as day”(「非常にはっきりと」)は慣用句としての強意的直喩である。

(40) “Mr Sansom,” said Amy, her lips *tight as the rosebud she stitched*. “It is Mr Sansom.”(p .121 .)

「サンソムさんよ。」エイミーは唇を縫いかけのバラの蕾のように堅く結んで言った。「サンソムさんですよ。」

本事例の被喩辞は「唇」である。エイミー(ジョエルの継母)は刺繍の縫い取りの練習中である。作業に集中しているために、彼女の唇は堅くすぼめられて

いて、その唇の様子が刺繍の図案であるバラの蕾にそっくりだというのが、本事例の文字どおりの意味である。何ら珍しくもない光景であるが、作者の観察力・想像力の鋭さと巧みな表現力を物語る好事例である。

さて、エイミーが唇をバラの蕾のように堅く結んだのは、実は、作業に集中しているためではなかった。作者が「彼女の、作業に集中している様子は不自然だった (... and the concentration of her work was unnatural: ... p.120 .)と書き添えているとおり、エイミーの心は別の思いに支配されていた。その思いとは、父サンソム氏 (Mr Sansom) が寝たきりで、目で合図を送ることと、赤いテニスボールを床に転がして注意を引きつけること、そして、ごく限られた種類の単語を発すること以外、意思の伝達手段を持たない状態であることを知ってショックを受けたばかりのジョエルにどう対応すればよいのか当惑し、ジョエルから発せられるであろう数々の質問に答えまいという思いであると推測できる。のちの章(8章)でランドルフから明かされるように、サンソム氏がランドルフの銃の誤射により寝たきり状態になるに至る背景には、愛憎が絡み合う複雑な人間模様が関係しているのだが、エイミーにはそうした経緯をジョエルに説明するなど断じてできなかったのである。だからこそ、エイミーは唇を縫いかけのバラの蕾のように堅く結び、「あれが、ぼくのお父さんなの？」(p.121 .)というジョエルの質問を受けて、本事例のように、「サンソムさんよ」と返すのが精一杯だったのである。本事例では、このようなエイミーの思いが強意的直喩によって見事に描き出されている。

(41) “Honey, a mighty peculiar thing happen to that old lady, happen just before she die: she grew a beard; it just commence pouring out her face, real sure enough hair; a yellor color, it was, and *strong as wire* ( p.124 .)

「坊や、あのお婆さんにはとても奇妙なことが起こったのよ。ちょうど亡くなる前にね。顎鬚が生えてきたの。顔からによきにょき伸びはじめたの。本物の毛よ。黄色くって、針金のようにごわごわだったわ。」

本事例の被喩辞は「顎鬚」である。発話者は、ランディングの使用人である黒人娘のズーであり、発話のなかの「あのお婆さん」とはランドルフの母、アンジェラ・リー(Angela Lee)を指す。アンジェラ・リーは、死の直前に「針金のようにごわごわ」の黄色い顎鬚が生えてきたという。何とも奇怪な現象であるが、奇怪さ(grotesqueness)は、周知のとおり、*Other Voices* の基調をなす要素である。そして、その奇怪さは作品のなかで、さまざまな倒錯により引き起こされている。女装を愛好し、拳闘家ペペ・アルヴァレス(Pepe Alvarez) ジョエルの父、サンソム氏はペペのマネージャーだった に恋心を抱くランドルフには、性の倒錯が明らかであるし、かつて栄華を誇ったクラウド・ホテルの、言わば「番人」として、今もなお、独りそこに住むリトル・サンシャインは、ランドルフ同様、時(現在及び未来と過去)の倒錯の象徴である。彼らにとって過去は現在や未来よりも尊い時空である。さらに、ランドルフの「死は生命よりも強い」(“... death is stronger than life, ...” p.148.)という言葉にも、生と死の倒錯が指摘できる。そして、本事例にも、この、生と死の倒錯のみならず、性(別)の倒錯が見てとれる。「顎鬚」は男性性の象徴であるし、「顎鬚」は死の間際に生えてきたというこのエピソードは、性(別)の倒錯に他ならない。しかも、その「顎鬚」が「針金のようにごわごわだった(strong)」(傍点筆者)のは、「死は生命よりも強い(stronger)」(同)という、上のランドルフの言葉にも通じるものがある。本事例は、単に「顎鬚」の硬質性を伝えるのみならず、この物語の基調をなす奇怪さのイメージを強調する効果をあげていると言えるであろう。

(42) ... ; his eyes, narrow and sly and black, glittered beneath brows *thick as mustaches*, ... (p.138.)

細くてずるそうで黒い男の目が、口髭のように太い眉の下で煌いていた。

本事例は、ランドルフの部屋の一枚の写真に写った人物の描写からの抜粋で

ある。彼の部屋は「何も置かれていない空間が僅か1フィート四方しかない」(p.137.)ほど、いろいろなもので溢れており、ここでは、この写真が前景化されている。写真にはランドルフのほか、ジョエルの父サンソム氏、拳闘家のペペ・アルヴァレス、ドロリス(Dolores)という名の若い女性が写っている。本事例はジョエルの目に映ったペペの描写の一部である。本事例を含むペペの描写は以下のとおりである。

The third man [Pepe], taller than his companions, cut an amazing figure; he was powerfully made and, even in so faded a print, very dark, almost Negroid; his eyes, narrow and sly and black, glittered beneath brows thick as mustaches, and his lips, fuller than any woman's, were caught in a cocky smile which intensified the dashing, rather vaudeville effect of a straw hat he wore, a cane he carried( p.138. )

「三番目の男は、ほかの連中よりも背が高く、異彩を放っていた。がっしりした体格で、色あせた写真ですら、肌の色は黒く、ほぼ黒人同然である。細くてずるそうで黒い彼の目が、口髭のように太い眉の下で煌めいていた。彼の唇は、どんな女性の唇よりも豊かで自惚れたような笑みを浮かべ、それが麦藁帽子に杖といういでたちの、粋で寄席芸人風の効果を引き立てていた。」

ランドルフは10年ほど前の23歳の頃にヨーロッパで暮らしたことがあった。ドロリスとはスペインで知り合い、各地を転々としたのち、ふたりはニューオーリンズにアパートを借りた。彼らは、やがて、ペペとペペのマネージャーのサンソム氏と知り合いになり、ペペとドロリスは恋仲になる。ランドルフもペペに恋心を抱くが、ペペとドロリスは姿をくらます。

ところで、ランドルフが女装を愛好することは前にも述べた。また、彼の顔が丸く、滑らかで、髭が生えておらず、桃色であるという特徴から、読者は彼に無力な赤ん坊を想起させることにも触れた。つまり、ランドルフは同性愛者

として設定されており、男女の性区分で言うと、「女性」である。だからこそ、ランドルフは自分とは対照的な、男性的で力強いペベに惹かれた。自分よりも背が高く、体格はがっしりとし、黒人同然の黒い肌、黒い目、口髭のように太い眉、豊かな唇の持ち主であるペベは、ドロリスと姿をくらまして10年経過した今もなお、ランドルフにとって忘れ去りえぬ人物であった。

このように、ジョエルの目をとおして描かれるペベの特徴は、一言でまとめると、「男性性」を強く印象づけるものである。もちろん、事例 (42)も、そうしたペベの印象を強める一要素になっている。そして、ペベの「男性性」の強調が、同時に、ランドルフの無力さや「女性性」を強調することにつながっていることも見逃すことはできない。

(48) ... : his [Joel's] head was *light as a balloon*, and as hollow-feeling; ice as eyes, thorns as teeth, flannel as tongue; ..( p .198 .)

・・・彼の頭は風船のように、そして、うつろなほど軽かった。氷の目、トゲの歯、フランネルの舌。

(49) ... : his [Joel's] head was *light* as a balloon, and *as hollow-feeling*; ice as eyes, thorns as teeth, flannel as tongue; ..( p .198 .)

・・・彼の頭は風船のように、そして、うつろなほど軽かった。氷の目、トゲの歯、フランネルの舌。

最後に事例 (48)と(49)である。この2事例は、3部構成、全12章からなる *Other Voices* の第2部最終章(11章)からの一文であり、「頭」を被喩辞とする。家を出をしたアイダベルとランディングを逃げ出したジョエルは、目的地も定まらぬまま、放浪の旅に出る。ふたりは、途中、ヌーン・シティで巡回ショーに立ち寄り。突如、雷雨が会場を襲い、ふたりははぐれてしまう。物語ではその後の経緯は説明されていないが、雨に打たれて高熱で気を失ったジョエルは、気が



つくと、ランディングで看病を受けている。事例(48)・(49)の一文は、未だ熱にうなされて、夢うつつの境をさまようジョエルの様子を描写している。

高熱に見舞われ、現実感覚や思考力などが極度に弱まったとき、ひとは宙に浮いているような、うつろな気分になるのかもしれない。本2事例は、そのようなイメージを巧みに伝えている。また、頭の状態の軽さを表す形容詞“light”と二つの喩辞“balloon”、“hollow-feeling”に子音“l”による子音韻が認められる点も、本事例の詩的特徴である。

### Ⅲ 7 その他の事例 (44)

(44) Then, in a voice *as urgent as the bell*, he [Randolph] added: ..(p.154.)  
それから、鐘のように切迫した声で、彼は言い添えた。

事例(44)の喩辞となっている「鐘(“bell”)」は、一説によると、4世紀ごろ、キリスト教徒によって教会に導入されたのが始まりで、死者の魂から悪霊を追い払う魔除けの道具として用いられたとされる。<sup>99)</sup>もちろん、その用途は多様である。“(as) clear as a bell”(「とても聞きとりやすい、澄んだ」という慣用句からも想像できるとおり、鐘の澄んだ音色が人々に時刻を告げたり、作業の開始や終了を知らせる合図として日常生活でも活用されてきた。本事例の鐘のイメージは、火災の際に緊急を知らせる半鐘の文化に親しんできた日本人には理解しやすい。連打される鐘の音から伝わる切羽つまった緊迫感と、ランドルフの、慌てて何かを言い添える焦りの気持ちが絶妙に重なりあっており、その場の雰囲気を実によく伝わってくるフレーズである。

以上のとおり、本節ではカポーティの搜索と判断可能な強意的直喩の22事例を7つのカテゴリーに分類したうえで、全事例にわたり、擬人法・誇張法・押韻・文脈や場面との関連性などの観点から詩的效果の考察を行なった。個々

の考察内容は、当然のことながら、個々の事例のもつイメージの喚起力がもととなって派生したものである。個々の事例のイメージ喚起力をどう受信するかは、読者によって千差万別であり、同じ事例であっても、感じ取りかた、解釈のしかたは多様でありうる。だが、隠喩表現について、解釈多様性 (interpretive diversity) が詩的度を高める要因の一つであると前稿で述べたのと同様に、<sup>8)</sup>感じ取りかた、解釈のしかたのそうした多様性こそ、個々の事例が「詩的」であることの証左である。

## 結び

本稿では、*Other Voices* のなかに確認できる、比喩標識“(as)~as”を用いた強意的直喩に注目し、その詩的效果について考察を行なった。

筆者は、まず、強意的直喩の概念を定義し、本稿において、カポータの創作による強意的直喩表現だけを考察の対象とする旨を明示した(第Ⅰ節)。つぎに、*Other Voices* には、“as much as”や“as soon as”などのごく日常的に用いられる慣用句を除けば、比喩標識“(as)~as”を用いた強意的直喩に該当するフレーズが51事例にのぼることを明らかにし、それらを「単なる比較(17事例)」「慣用句化された強意的直喩(12事例)」「詩的度に関わる強意的直喩(22事例)」に区分した(第Ⅱ節)。そのうえで、「詩的度に関わる強意的直喩」の22事例を7とおりのカテゴリーに細分化し、その各々について詩的效果の考察を試みた(第Ⅲ節)。

考察の結果、「詩的度に関わる強意的直喩」の事例においては、「慣用句化された強意的直喩」の場合とは異なり、二つの“as”にはさまれた形容詞や副詞の意味が強められるという強意的直喩固有の側面よりも、被喩辞と喩辞とのあいだの、意外で新鮮味あふれる表現上の趣向のほうに、比喩表現としての「味わい」が認められるということが明らかになった。それは、たとえば、慣用句“as cool as a cucumber”を「たいへん冷静で」と意識しても、何ら違和感を伴

わないのに対して、“Relaxed as a rag doll” (事例 31) を「たいへんリラックスして」と訳出すると、原義のもつ「味わい」が損なわれてしまうという印象を否めないことから明らかである。

「詩的度に関わる強意的直喩」の22事例は、どれも、原義のもつ「味わい」を保持している。だからこそ、新鮮で、意外で、個性的で、イメージ喚起力に富むのである。数のうえでは、けっして多いとは言えないが、カポーティの創作になる22の強意的直喩もまた、*Other Voices* の詩的雰囲気高めの一要因となっている。

## 注

- (1) 大園弘「カポーティ小説の詩的特質(1) 韻律効果の考察」『教養研究』九州国際大学教養学会 第22巻第1号(2017年7月), pp.1-45. 参照。
- (2) 大園弘「カポーティ小説の詩的特質(2) “(-)like”を用いた直喩表現の考察」『紀要』九州国際大学社会文化研究所第76号(2017年9月), pp.1-25. 参照。
- (3) 『研究社 - ロングマンイディオム英和辞典<普及版>』(研究社 2003)によると、“as pretty as a picture”の初出年は1909年、“as busy as bees”の初出年は1535年、“as cool as a cucumber”の初出年は1627年とされている。東信行ほか訳編『研究社 - ロングマンイディオム英和辞典<普及版>』東京:研究社,2003年, p.65., p.94., p.392. 参照。
- (4) Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House, 1948, p.24. 以下、テキストはこの版を用いる。引用の際には、引用文のあとに括弧を付し、ページ数のみ記す。
- (5) 松村明編『大辞林』東京:三省堂書店、1988年, p.587.
- (6) 引用文中の「女」が女装したランドルフであることは読者には推測がつかうのであるが、ジョエルは亡霊であると信じ込んでしまう。
- (7) 上本明『現代英語の強意表現』東京:篠崎書林、1965年, p.158.
- (8) 松村明、前掲書、p.1175.
- (9) 事例<sup>42)</sup>の英文の発話者はランドルフであるが、ランドルフを造形したのは作者カポーティであるので、この英文に作者の独創性が反映されていると考えても問題はないと思われる。

- (10) 佐々木健一監修 『レトリック事典』 東京：大修館書店、2006年、p 215 .
- (11) Crane, Milton ed. *50 Great Short Stories*. New York: Bantam Dell, 2005, p.191.
- (12) 東信行ほか、前掲書、p 41 .
- (13) 佐々木、前掲書、p 286 .
- (14) 佐藤信夫 『レトリック感覚』 東京：講談社学術文庫、1992年、p 228 .
- (15) 本事例は、人間のからだの一部(「目」)を被喩辞とするために、Ⅲ 6 に分類することも可能だが、内容的には誇張表現に該当すると判断し、本細目に加えている。
- (16) 瀬戸賢一 「『誇張』と『ひかえめ』の修辞」 大阪市立大学 『人文研究』 39(7) (1987年) p 525 . 参照。
- (17) 同、p 523 . 参照。
- (18) 同、p 521 . 参照。
- (19) Garai, Jana 『シンボル・イメージ小事典』(中村凧子訳) 東京：社会思想社、1990年 . (原書名: *The Book of Symbols*, New York: Simon & Schuster, 1974) pp 225 227 . 参照。
- (20) 大園弘 「カポーターティ小説の詩的特質(2) “(-)like” を用いた直喩表現の考察」  
p 3 .

## 参考文献

- ・ 稲澤秀夫 『トルーマン・カポーターティ研究』 東京：南雲堂、1970年 .
- ・ 上本明 『現代英語の強意表現』 東京：篠崎書林、1965年 .
- ・ 大園弘 「カポーターティ小説の詩的特質(1) 韻律効果の考察」 『教養研究』 九州国際大学教養学会 第22巻第1号 (2017年7月)
- ・ 「カポーターティ小説の詩的特質(2) “(-)like” を用いた直喩表現の考察」 『紀要』 九州国際大学社会文化研究所第76号 (2017年9月)
- ・ 佐々木健一監修 『レトリック事典』 東京：大修館書店、2006年 .
- ・ 佐藤信夫 『レトリック感覚』 東京：講談社学術文庫、1992年 .
- ・ 瀬戸賢一 「『誇張』と『ひかえめ』の修辞」 大阪市立大学 『人文研究』 39(7) (1987年)
- ・ 東信行ほか訳編 『研究社 - ロングマンイディオム英和辞典 <普及版>』 東京：研究社、2003年 .
- ・ 松村明編 『大辞林』 東京：三省堂書店、1988年 .
- ・ Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House 1948.
- ・ Crane, Milton ed. *50 Great Short Stories*. New York: Bantam Dell 2005.
- ・ Garai, Jana 『シンボル・イメージ小事典』(中村凧子訳) 東京：社会思想社、1990年 . (原書名: *The Book of Symbols*, New York: Simon & Schuster, 1974.)

## Poetic Characteristics in Capote's Prose (3)

### Usage and Effect of Intensifying Simile

Hiroshi Ozono

The aim of this study is to make it clear that the usage of original intensifying simile in *Other Voices, Other Rooms* is also one of the major factors that heighten the poetic atmosphere in Capote's prose. Section one of this paper tries to briefly define intensifying simile. Section two classifies fifty-one cases using "(as) ~ as" form, except such common phrases as "as much as" and "as soon as," into three types: positive, idiom, or original intensifying simile. Section three focuses on twenty two figurative phrases in the third type, subdivides them into seven categories, and examines how poetic effect is created in each phrase. This paper concludes that various patterns and devices of intensifying simile provide this novella with poetic atmosphere.

Key words: Truman Capote, *Other Voices, Other Rooms*, intensifying simile, poetic atmosphere